

会派視察・研修報告書

会派名 自民クラブ

代表者名 柴田雅也

1 日 に ち	令和2年2月6日（木）
2 視 察 先	東京ドーム テーブルウェア・フェスティバル2020
3 参 加 者	山田徹・玉置真一・城處裕二・吉田企貴・柴田雅也
4 調査・研修の テーマ	視察：美濃焼業界の出展状況および他産地の出展状況について
5 主な内容	<p>◎多治見ブース</p> <p>□多治見 多治見市美濃焼振興協会『わたしの逸品 まいにちの逸品』</p> <p>生活にうるおいをもたらす器『カジュアル』</p> <p>こだわりのライフスタイル『カジュアルモダン』</p> <p>美しい暮らしを彩る器『プレシヤル』</p> <p>多治見陶磁器上絵加工工業協同組合</p> <p>伝統と技が光る器『窯元』—早蕨窯、東山窯、蔵珍窯、草の頭窯、ひろし窯、仙太郎窯、玉山窯、藤兵衛窯</p> <p>豊かな感性が生み出す世界 —若手作家</p> <p>◎他産地</p> <p>□土岐市</p> <p>窯元のおもてなし『どんぶり百選』</p> <p>窯ごとに展示 商品の特徴、製造方法を説明</p> <p>品種ごと さんま皿、スープカップ、どんぶりなど 使用目的に合わせた展示</p> <p>□波佐見焼</p> <p>『長崎のやきもの 暮らしのアトリエ』</p> <p>喫茶うれしの実行員会</p> <p>波佐見焼主催者特設企画</p> <p>□有田焼</p> <p>『選ぶ楽しさ使う喜び』</p> <p>□瀬戸焼</p> <p>『卓越の技』彩の器</p> <p>瀬戸織部</p> <p>□とこなめ焼</p> <p>『一期一会の茶の間づくり』</p> <p>◎特集企画</p> <p>□『卓越の技』彩の器</p> <p>～瀬戸焼～</p>

<p>6 所感、提言事項、 課題等</p>	<p>【山田徹】</p> <p>縮小する国内需要の講義を先日受けてきたが、フェスティバル内での多治見ブースは多くの人々が行き^なきたいへん活気に溢れている印象があったが、新型コロナ肺炎の影響もあり来場者数は少ないと出品しているスタッフの方が話していた。</p> <p>数多くの作品が販売されており織部や黄瀬戸など人気があった。海外からの観光客も多くみられ購入されている方もいた。昨日の話でもあったように国の積極的な支援を受けながら海外にも販路の拡大をしていけたらいいと思う。</p>
	<p>【玉置真一】</p> <p>テーブルコーディネート作品「優しい食空間コンテスト」や窯元のおもてなし「どんぶり百撰」「卓越の技」その他ノリタケ、大倉陶園など「洋の器への誘い」などテーマにそった展示がされており器の用途、品質、デザイン、機能性だけでなく現在のライフスタイルの中での陶磁器の位置づけ、テーマ、ストーリーを創りデザイン、スタイルすべてを^つコーディネート、プロデュースし商品をアピールするブース創りなど勉強になった。</p> <p>商談目的の国内外の商社関係者と思われる入場者の他、入場有料ではあるが朝早くから一般の多数の方が来場され即売コーナーなど賑わいが有った。</p> <p>今年開催される国際陶磁器フェスティバル美濃2020も商業的に大成功といえる催しを目指すべきである。</p>

<p>6 所感、提言事項、 課題等</p>	<p>【城處裕二】</p> <p>コロナウィルスの影響が危ぶまれましたが、昨年比90%を超える入場者が有ったとのことで先ずは何よりです。初めて参加させて頂きましたが、大変賑わいと活気のあるイベントでした。テーブルウェアとしてプレゼンすることで暮らしを豊かにする器をイメージ出来ました。全国の産地もそれぞれ特徴があり大変勉強になりました。波佐見焼のふるさと納税の取り組みなどの情報も活かしていけると良いと思いました。</p>
	<p>【吉田企貴】</p> <p>例年視察に訪れているテーブルウェアフェスティバルは、名古屋地区のイベントと比べればずいぶん盛況であると言える。しかしながら、新型肺炎の影響もあり、客足は例年より1割ほど低下しているとのこと。</p> <p>土岐や有田は商品の陳列以外にも器を使った盛り付け写真を掲載したり、パスタ皿やサンマ皿と言った具合に用途ごとの陳列をしたりと消費者に対して提案する形のレイアウトになっていました。多治見もこう言った点は見習うべきに感じました。実際、私が訪れた際には明確な差が集客に出ている様に思います。</p>

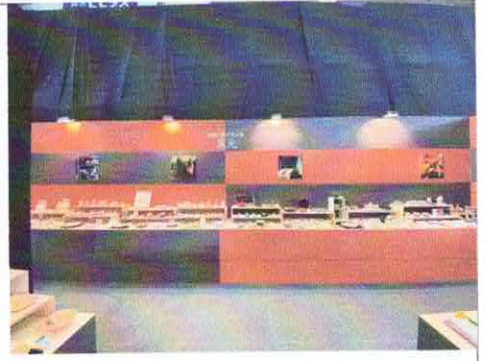
【柴田雅也】

テーブルウェアフェスティバルは個人顧客を相手にした消費者ニーズを肌で感じる事ができる最大イベントである。

今回は視察当日までの状況であるが入場者数が前年比10%減ではないかという印象を聞いた。その要因が現在、事態が拡大している新型コロナウイルスの影響もあることは想像できるが、個人客だけではなく商材を求めて来場するバイヤーも例年と比べて見かけないということは大変な影響があると感じた。そのような中で美濃焼振興協会の多治見ブースだけでなく他産地ブースの状況も関心をもった。

多治見市の美濃焼振興協会の出店状況は『カジュアル』『カジュアルモダン』『プレシヤル』『多治見陶磁器上絵加工工業協同組合』『窯元』『若手作家』と器を使う食卓シーンを想定しての展示スタイルは多治見の定番になっている。ただ、土岐市ブースの『どんぶり百選』では「さんま皿」「スープ皿」など具体的な料理目的の括りで商品を並べたり、各窯元ブースで窯元当事者が製造手法など直接来場者に説明するスタイルは購買意欲をそそり、現実には人だかりができていた。このような展示の仕方は他産地でも見られた。参考にすべき特徴であると感じた。また、瀬戸、有田焼や波佐見焼など産地も独自性と新鮮さを出した出展をしていた。多治見市（美濃焼振興協会）としてもマンネリ化せず、常に消費者ニーズを敏感に嗅ぎ取って多治見市の「うつわ」をアピールしていくことが今後の展開においても重要になってくると感じた。

最後にこのテーブルウェアフェスティバルは個人客を対象にしたBtoCのイベントであると捉えているが、将来に向けて持続可能な地場産業の取り組みとして考えるならば、このテーブルウェアフェスティバルで消費者ニーズを敏感に嗅ぎ取って、新たな商品開発へつなげることが重要ではないだろうか？そして、持続性のある事業展開のためにBtoBにも視点においたギフトショーやホテルスショーなど他イベントと連動した戦略が重要であると感じた。



7 写真等

